

世界のコミュニティ通訳者のネットワークについて  
- 第4回クリティカル・リンク国際会議 (Critical Link 4) をめぐって -

西松 鈴美

(大阪外国語大学大学院)

1. クリティカル・リンクの紹介

「クリティカル・リンク (Critical Link)」は、カナダのオタワ大学のブライアン・ハリス<sup>1)</sup> が *Language International* 誌の編集長 (1990-1996)、ジオフリー・キングスコット<sup>2)</sup> の協力を得て、1992年に立ち上げたコミュニティ通訳者のネットワークである。カナダでは2000年にCritical Link Canada: National Council for the Development of Community Interpreting として正式な非営利組織として法人化され、活発な活動を行っている。<sup>3)</sup>

クリティカル・リンクは3年毎に国際会議を開いており、これまで1995年、1998年、2001年とカナダで開催された。今回の第4回はスウェーデンのストックホルム大学で開催されたが、これはカナダ外で開催された初めての国際会議である。第5回はオーストラリアで開催予定となっている。これまでの第1回から第3回までの論文はオンライン<sup>4)</sup> あるいはJohn Benjamins Publishing Companyで入手可能である

第4回は2004年5月20日から5月23日まで開催され、テーマは「コミュニティにおける通訳の専門化 (Professionalization of Interpreting in the Community)」であった。30ヶ国から354名が参加し、基調講演、特別講演が4件、パネルおよび論文発表は70件以上、ポスターセッションは20件以上を数えた。論文発表では本学会の津田守会員 (大阪外国語大学教授) が “Training Professional Interpreters and Translators: Experiences of a Graduate School in Japan” のタイトルで発表を、また、金澤眞智子会員 (大阪外国語大学大学院博士後期課程在学中/京都外国語大学非常勤講師) が “ ‘Community Interpreting’ in Japan: Clients’ Ordeals and the Witnesses’ Mission” というタイトルのもとポスターによるプレゼンテーションを行った。

基調講演者は Susan Berk-Seligson (ピッツバーグ大学 [アメリカ])、Frank Harrington および Graham Turner (セントラル・ランカシャー大学 [イギリス])、

---

NISHIMATSU Suzumi, “A Global Network of Community Interpreters -- A Report on Critical Link 4.”

*Interpretation Studies*, No. 4, December 2004, Pages 171-176

(c) 2004 by the Japan Association for Interpretation Studies

Kenneth Hyldenstam (ストックホルム大学 [スウェーデン])、Franz Pöchhaker (ウィーン大学 [オーストリア]) の4名であった。

基調講演は20日と21日は1件ずつ、22日は午前と午後に1件が実施された。その他のプログラムは4つのホールに分かれて同時に開催された。

## 2. プログラムの分類

プログラムを分類してみると以下のようなになる(なかにはキャンセルされた発表や追加で新しくなされた発表もあるがプログラムをもとに分析を行った)。

- パネルセッション (5件)
  - イギリスのナショナルレジスター (全国登録制度)
  - 法廷通訳
  - 医療通訳
  - 通訳エージェンシー
  - 通訳養成
- 論文発表 (78件)
  - 通訳トレーニング及び養成関連 (19件)
  - 医療通訳関連 (16件)
  - コミュニティ通訳の専門化関連 (13件)
  - 司法通訳関係 (8件)
  - 各国の現状報告 (7件)
  - 通訳倫理 (4件)
  - 子供のための通訳 (4件/うち手話言語関連3件)
  - 文化と役割 (4件)
  - 通訳全般に関するリサーチ (3件)
- ポスターセッション (28件)
  - コミュニティ通訳関連 (7件)
  - 司法通訳関連 (2件)
  - 手話通訳関連 (5件)
  - 認定制度および通訳の質関連 (5件)
  - 医療保健通訳関連 (4件)
  - その他 (2件)

こうしたプログラムを一覧するだけでもコミュニティ通訳がいかに幅広い領域をカバーしているかを窺い知ることができる。司法、医療の分野に大別されるとは言え、トレーニングや制度、行政との連携、民間との連携とさまざまな要素が絡んでくる。

さらにはコミュニティ通訳で使用する言語には、口頭言語 (verbal language) と手話言語 (sign language) の双方が含まれている。以下、筆者が出席したセッションからいくつかを紹介する。

### 3. セッションの紹介

#### 3.1 基調講演

Franz PÖCHHAKER (オーストリア) は “Critical Linking Up: Kinship and Convergence in Interpreting Studies” と題して、専門的な通訳翻訳という職業とリサーチの間の緊密な重要性を説いた。また、16世紀のスペインではアメリカの植民地統治のために通訳者を使うという法律が既に存在しており、その法律には倫理も含まれているという史実も取り上げられた。コミュニティ通訳の歴史が会議通訳よりも長いということから、20世紀に入ってから通訳翻訳研究を振り返り、結論としてコミュニティ通訳翻訳分野がいかに細分化されてしまっても大きな図を常に構えていればよいとしたことは、この会議をまさに象徴する言葉であった。

Susan BERK-SELIGSON (アメリカ) は “Interpreting for the Police: A Cautionary Tale” と題する講演で、英語とスペイン語のバイリンガルの警察官が通訳と捜査官の双方の役割を果たした例を紹介した。ディスコース・アナリシスが2例紹介され、バイリンガルの捜査官はアド・ホック通訳人であり、こうした通訳人を使うことは供述を強要することになるのではないかとの問題を投げかけた。また、バイリンガルと言っても、これらの例の場合では高等学校で数年、大学で少しのスペイン語を学んだだけで、通訳としての語学力すら問われた。また、テネシー州ではデモグラフィが変化してヒスパニックの人口が増加したにも関わらず、警察でスペイン語の話せる人数が少ないことから、警察官のための認定プログラムを実施することになったのであるが、こうしたコースは短期間で言語面でも倫理面でも不足であることが指摘された。

#### 3.2 パネル・セッション

“National Register of Public Service Interpreters (NRPSI): Establishment, Maintenance and Development” と題するパネル・セッションでは Ann CORSELLIS、Jan CAMBRIDGE (イギリス)、Mickey GLEGG (同)、Sarah ROBSON (同)、Leena IDH (スウェーデン) が活発な議論を繰り広げた。なお、イギリスの公共サービス通訳者全国登録制度である National Register of Public Service Interpreters については英国言語学協会 (Institute of Linguists, IoL) の Web サイト内にある NRPSI のページ (<http://www.iol.org.uk/nrpsi/>) で詳しい情報を見ることができる。EU では通訳翻訳という職業の定義を定めており、イギリスの Public Service Interpreters (PSI) にも適用している。ただ、試験ができず、プロのレベルを期待できない希少言語の場合は、志願者の背景調査を行い、倫理規定にサインしてもらっている。また、クライア

ントから苦情が出た場合は制裁措置がある。通訳者のリストも本人たちの了承の範囲で公開しており、87 言語で約 8000 名が登録している。これらのリストは定期的に更新され、言語のみならず、性別、分野、資格や出身国等で通訳者を探ることが可能である。司法の分野では NRPSI の通訳者を使うことが普及し、医療分野でもこのシステムに加入している通訳者の使用に関心を示し始めているのが現状である。この後、Leena IDH からスウェーデンの認定制度について認定制度ができた背景、現行の試験制度などについて説明が行われた。

### 3.3 論文発表

Olgierda FURMANEK (アメリカ) による “Promoting Professional Interpreting Standards Through Students’ Internship” は、自身が教授する Wake Forest 大学におけるプログラムを紹介した。彼女が教鞭を執る Wake Forest 大学はノースカロライナ州にあり、過去 5 年間にフロリダ等から南西部へヒスパニックの流入が増大し、通訳者が不足するという事態に陥った。そこで、学生たちにインターンシップとして最終学年の最終学期に 100 時間の実習を行わせることにした。これはコミュニティを活動の場とするプログラムで、学生たちをインターンシップによって、通訳コーディネータやマネージングではなく、サービス提供者として養成し、草の根レベルから通訳の質の向上を図るのが狙いである。インターンシップで学生を受け入れたクライアントからは 90% が通訳を使うことについて学生から影響を受けたとポジティブな反応を示した。最後に法学部や医学部の段階での通訳使用教育を提唱して発表をしめくくった。

Yvonne FOWLER (イギリス) の “Thinking About Assessment (And Who Should Do It?)” ではアセスメントには 3 つの側面があるとしている。ひとつは同僚からの評価、第 2 は自己評価、そして通訳トレーニングにおける評価である。ただし、学生はパフォーマンスを分析的に評価する手段が欠けているために、なかなか自己評価ができないとしている。評価をする場合、数値的な方法と感覚や意見の両方が大切である。また、通訳はひとりで行う作業であり、誰もモニターしてくれないので、通訳者にとって自己評価は重要であり、質の向上に役立つ。同僚あるいは自己評価の場合には、理論的知識、オリエンテーションプログラム、フィードバックのやり方について予備知識が必要である。フィードバックは、訓練中の通訳者、同僚、サービス・プロバイダー、講師の順番で行われるのが望ましい、とする。こうした評価を経験した学生からは、ネガティブな点をポジティブに変えるのが難しい、行動規範にもっと集中するようになった、自分のパフォーマンスをオブザーバーの視点で捉えられるようになった、通訳という技術をこれまで以上に複雑で複合的な技術として考えられるようになった、できる限り黒子に徹するという事を見習いたい、といった感想が寄せられた。他人を評価することは自分を評価することにもつながるので、理論を勉強したうえできちんと評価することを学ぶことを強調して発表を終えた。

#### 4. 所感

以上が、参加したセッションのほんの一部分の報告であるが、セッションのほかにも、プログラムには、20日の会議後の歓迎レセプション、21日の昼食時にはノーベル賞が授与されるストックホルム・タウン・ホールでの昼食会、22日は希望者のみであるがバンケットが催され、セッションだけでは補えない交流が多く用意されていた。

参加者には先に紹介した Franz PÖCHHAKER、Uldis OZOLINS が発表したばかりでなく、Helga NISKA、Holly MIKKELSON といったそうそうたる顔ぶれがいた。

コミュニティ通訳分野は大学等の教育機関だけでなくエージェンシーや NPO、NGO といったさまざまな団体が関与する。また、その領域も司法や医療と広いのみならず、手話までも抱合している。そのため、こうしたセッション外の活動が多いことは各自の領域での交流のみならず、その他の領域の団体や人たちとの交流という意味においてはよく考慮されたプログラムと言えよう。残念ながらプログラムのタイトルだけでは手話言語を扱うのか口頭言語を扱うのかが判別しにくく、せっかくセッションに出たが、手話言語に関する発表であったために筆者には理解のおよばないこともあり、残念であった。

さらに、“Linguistic Human Rights/Linguistic Citizenship and Linguistic Minorities” のなかで、バイリンガリズムの権威であり、Swedish Minority Act の起草にも関わった Kenneth HYLSTENSTAM は、コミュニティ通訳は言語維持 (Language Maintenance) につながる点を強調したが、こうした領域までもコミュニティ通訳であるとするならば、ますます幅広い分野をカバーすることになるので、今後、どのような細分化を行い、各々の分野で目指す目標とコミュニティ通訳領域が描く概観をすり合わせていくかが課題となるのではないだろうか。

また、日本では現在のところ「コミュニティ通訳」という語を使用しているが、コミュニティ通訳に対する概念が国によって違うことに起因して、クリティカル・リンクでは、“Community Interpreting” あるいは “Community-based Interpreting” と2通りの言い方をしていることに気づいた。また医療通訳という言葉にしても “Medical Interpreting” や “Health Care Interpreting” とさまざまな言い方をしている。

クリティカル・リンクにおいては、用語の統一をするか否か、口頭言語と手話言語での共通の課題をどう共有するか、各々の分野での特有の課題を掘り下げ、その経験をどう全領域と共有していくかが今後の課題となるであろう。

しかしながら、こうしてコミュニティに関わる通訳の研究者、実務者が集い、情報を交換する場としてのクリティカル・リンクの果たす役割や意義は大きく、これまで学際的にあつかわれてきた領域がひとつの分野として確立されていく将来性を思うと、スウェーデンでの会議をきっかけとしてさまざまな国での開催がより期待されるところである。

なお、本報告にあたっては 2004 年 7 月 31 日に行われた日本通訳学会コミュニティ

ー通訳分科会第3回会合で発表の場を与えていただき、貴重なフィードバックをいただいた。ここに記して謝辞としたい。

---

著者紹介： 西松 鈴美 (NISHIMATSU Suzumi) 通訳者 (スペイン語) 1992 年より司法通訳翻訳関係、その他の分野でのスペイン語通訳翻訳実務活動を開始。現在もフリーランスで通訳翻訳業に携わっている。96 年以降、大阪、高松、広島などの各地方裁判所法廷通訳セミナーの講師を務める。現在、実務の傍ら大阪外国語大学大学院博士後期課程在学中。  
連絡先: [suzumi@mbox.inet-osaka.or.jp](mailto:suzumi@mbox.inet-osaka.or.jp)

---

【註】

- 1) ブライアン・ハリス (Brian Harris) は 1975 年～1979 年、および 1991 年～1994 年の 2 期にわたってオタワ大学の翻訳通訳学部 (School of Translation and Interpretation) の学部長を勤めた。主な著書・論文に *Language International World Directory of Translation and Interpreting Schools*. 1997. John Benjamins. および "Teaching interpreting: a Canadian experience." In *Teaching Translation and Interpreting: Training Talent and Experience. Papers from the First Language International Conference, Elsinore, Denmark, 1991*. Cay Dollerup and Anne Loddegaard (eds.). 1992. John Benjamins. がある
- 2) ジオフリー・キングスコット (Geoffrey Kingscott) は国際的な活動をしている翻訳研究者・実務家で、数々の国際会議の運営に関与するとともに、*Language International* (1990-1996), *Language Today* (1997-1999) および *International Journal for Language and Documentation* (1999-2000) などの専門誌の編集にも携わる。現在は英国に拠点を置き、翻訳関連のコンサルタント会社を経営。詳しくは以下の URL 参照。  
<http://www.geoffreykingscott.co.uk/contents.html> (04 年 9 月末日現在)
- 3) Critical Link Canada について詳しくは以下の URL 参照。  
<http://www.criticallink.org/English/index2.htm> (同上)
- 4) URL は [http://www.criticallink.org/English/conference\\_papers.htm](http://www.criticallink.org/English/conference_papers.htm) (同上)